

一八八六年四月十二日(月)

コシポールの別荘で親しい信者たちと共に

コシポールの別荘で信者たちと共に

聖ラーマクリシユナは、コシポールの別荘の二階広間で、ベッドの上に坐っておられる。部屋にはシャシーとモニがいる。タクールはモニに、ウチワで扇あおぐようにと合図をなさった。モニは扇あおぎはじめる。

午後五時から六時頃、月曜日。チョイトロ月の最後の日。春のドウルガー女神の祭礼が行われる日である。チョイトロ白分八日目。チョイトロ月三十一日、一八八六年四月十二日。

近所にベンガル暦の一年最後の日を祝う市が立っていた。タクールはちよつとした品物を買わせるために、一人の信者をその市に使いに出された。その信者が戻ってきた。

聖ラーマクリシユナ「どれ、買ってきたものは？」

信者「砂糖菓子が一パイサ、ボンテイ(訳註)(野菜包丁)が二パイサ、さじ二パイサ」

聖ラーマクリシユナ「ナイフは？」

信者「二パイサでは売ってくれなかったものですから……」

聖ラーマクリシユナ「(急ぎ立てて)——早く、早く、行ってナイフを買ってきておくれ」

校長は階下を何となく歩いてきた。するとナレンドラとターラクがカルカッタから戻ってきた。ギリシユ・ゴーシユの家や、そのほか数ヶ所に行ってきたのである。

ターラク「今日は肉や何かを、たらふく食べてきました」

ナレンドラ「今日は非常に心が低下した。さーて、修行しなくちや。

(校長に向かつて)——何とどう Slavery of body, — of mind! (まるで、肉体と心の奴隷になったみたいだ)重荷を背負わされて——体と心が僕のものじゃなくて、誰か別の人のものみたいだ」

日が暮れた。上の部屋をはじめ、あちこちに明かりがついた。タクールはベッドの上に北を向いて坐っていらつしやる。そして、宇宙の大実母を想っておられる。間もなく遊行者が、タクールの前でアパラダ・バジャン(懺悔の祈詞)を朗詠した。この遊行者はバララムの家に仕える聖職者の身内の一人である。

我 生まれし前 母の胎にて激しい苦しみを味わうも

(訳註) ポンティ——インドで使う包丁は木製の台座から包丁の刃が突き出したように固定されていて、野菜や魚をこの包丁に押しつけて使用する。

生まれし後、あなたの御足に触れもせず、祈ることもせず

幾度もこの世に生まれしが、なおもあなたの許に逃れることも、仕えることもせじ

恐ろしき御方よ どうか我が罪を許したまえ

(サンスクリット)

部屋にはシャシーとモニのほか、二、三の信者がいた。

祈詞スタクが終わった。聖ラーマクリシュナは心からの尊敬の念を表わして、合掌して頭をお下げになっ  
た。

モニはタクールを扇いでいる。タクールは手まねでモニにおっしゃった——「石のお椀を一つ、持つ  
てきておくれ。こう言いながら、石椀の形を指でつくってみせる。一ポー(約250cc)牛乳が入るよう  
のを、白い石の——」

モニ「かしこまりました」

聖ラーマクリシュナ「ほかの椀で汁を飲むと、何だかみんな魚の臭いがして生臭いんだよ」